

深イ〜話!

No.50

東日本大震災ももうすぐ2年が経とうとしています。
——現地で被災者の取材をしている毎日新聞記者の記事より——

津波で74歳のおばあちゃんを亡くした家族にも会いました。
震災が起こったとき、家にはおばあちゃんとおじいちゃんとその次女、それから長女の娘がいました。長女の娘はダウン症で引きこもりでした。長女は高台の保育園に勤めに出ていて留守でした。

大きな揺れが来て、家族は高台に逃げようとしみます。おじいちゃんは家の前に車をつけました。エンジンをかけて待っています。次女は、長女の娘がパニックを起こさないように手を引いて一步一步誘導しました。

おばあちゃんは地震の最中、携帯電話を探していたそうで、なかなか家から出てきません。ようやく玄関から出てきたとき、津波が後ろから防潮堤を乗り越えてやってきました。おばあちゃんはそれに気付きました。そして叫びました。

「行げー！ おらのことはいいがら、振り向かねえで行げよー！」

おじいちゃんはその瞬間にアクセルを踏みました。

急発進した車は高台に走りました。後ろから聞こえたそうです。

「生きろよー！ ばんざーい！ ばんざーい！」

それから数日後、長女は逃げた三人と再会しました。しかしそれからずっと彼女は苦しみ続けます。

「どうして母さんを置いて逃げたのか」という父と妹に対する怒り。

もう一つは、「自分の娘に障害がなかったらお母さんは助かったんじゃないか」という気持ち。それでずっと心が揺れ続けるのです。彼女は、亡くなった母親の後を追って死にたいとまで考えました。

しかし、そう思った彼女を踏みとどまらせたのは、母親の最後の叫び声でした。
お母さんは、自分の命を投げ出しても家族に「生きろ」と言った。車に乗っていた三人に「行げー！」と言った先には自分がいたのではないか。
年が変わった頃くらいから、彼女の気持ちはそのように変化していきました。

このおばあちゃんは、うちの母と同世代です。

私の母も、この状況におかれたら、おんなじことをしてたと思います。

「自分のことはいいから、生きろ」と。母親とは自分を犠牲にしても子供の幸せを願うものなんですよ。